

天空の観察者—ハンドアウト

ヒマラヤ遠征にまつわる追加所見

【ブリュクスター大学の旧図書館で調査中に発見された1816年の
『地理学研究所会報』にある記事(P.70の手がかり)を参照】

地理学研究所会報 115

本会報1月号で行なわれた「ヒマラヤの動物学的発見」に関する興味深い議論に、いくつかの考察を加えようと思う。

1909年、バラットは猿に似た死体を発見したと報告したが、それに魚の背骨や四肢の関節の結合に苔が使われているなど、他の動物の解剖学的構造の既知のパーツが組み込まれていることに彼は注目した。この生物が少なくとも部分的には人間の手によって作られ、まだ知られていない何らかの宗教的儀式の一部を形成していたと彼は示唆している。

標本の解剖学的構造の特定のパーツが人間の手によって作られたものでしかありえないことに私も疑問は持たないが、私たちが行なった最近の探険による観察が、問題は見た目よりも複雑である可能性があることを示唆している。私たちが観察したのは温かい、つまり死んだばかりの類人猿で、これまで観察した他のものたちよりも大型で、頭蓋骨には奇形が見られる。完全な内診は不可能だったが、ざっと調べたところ、手足の関節に苔を使い、魚類を含む他の生物の解剖学的構造が組み込まれているというバラットの観察が確認された。標本が死んだばかりであるということは、それが作られたものではなかったことを示唆している。

したがって、私はこの生物が他の生物の解剖学的構造の一面を、何らかの方法で取り込んでいるのだと提唱する。これがどのようなメカニズムで起こるのかはまだ分からないが、調査を進める価値があるのではないだろうか。

科学論文

【王立科学大学のエドワード研究所で調査中に発見された
『実験宇宙物理学に関する新学術雑誌』より(P.67の手がかり2を参照)】

観察された結果によって証明されたわけではないが、それらと一致している。

その他の点についても簡単に検討しておこう。結果が示すのは、間隔を置いて現れる、説明のできない不規則な振幅変動で、それらの振幅は再び安定するまで、1～2分間で急激に変動している。このような変動期間は、上記の結果と計算からは除外された。とはいえ、このようにして振幅に影響を与える可能性のある既知の外的要因全てを制御した上で、これらが発生したことに注目するのは重要なことである。実際、観察された「脈動」パターンの振幅に影響を与える既知の要因はないだろう。本研究はこの現象を説明しようとするものではないが、ここに記しておくのは将来の研究者たちの役に立つようにするためであり、さらなる調査に値する可能性があるからである。

結論として、ウォーカーの理論が示唆する観察の証拠は見つからなかったため、我々としては

TRAIL OF CTHULHU

最後の黙示

